伊豆諸嶋の聚落

辻村太郎

一　緒言

大正元年八月に東京地學協會の學術旅行に加はつて豆南諸嶋の航海を試みたことがあつた。其の第一日に八丈嶋に一日を費したのは私が嶋の生活に親んだ初めであつて、此の時指導の勞をとられた、小川博士一行と八丈富士に登る道すがら得た地理的智識と共に、嶋嶼に對する興味を引き起したのである。其後四五年間に專ら火山現象を觀察する目的で屢々訪問した二三嶋に就て、小火山嶋に於ける生活相の一端を地理學的に窺つて見たいと思つても、何分專門以外の仕事であるので確實な調査をする暇も無く十年は過ぎて了つた。

今本誌聚落號の計劃を機として、此の首都に近くして、しかも忘れられ勝ちな嶋々を同學の士に紹介し得ることを欣びとすると共に、整然とした科學的叙述をする爲めに準備の乏しいことを最も遺憾に思ふ。更に完全な系統的調査は後の熱心な學者の手に委ねたい。此所で述べる所の觀察結果の概略を擧げれば、(1)伊豆諸嶋中の嶋々では比較的近距離にあるものゝ間にも割合に違つた生活が見られる。(2)一嶋の中に於ても各村落間の相違點が比較的甚しい。(3)此等の關係は交通の不完全と、自然環境が小區域間に於ても變化に富むことから起る。(4)全嶋群に通じて共通な生活形態と諸嶋以外に於ける形態との間に見出される相違は此れ亦交通の發達の低

さから起る。(5)交通の發達程度が生產の强度に關係があり、從つて文化の程度を決定し文化風景の特性を與へ、其の一表現として聚落形狀が一定の特徵を帶びる。(6)此等の關係より文化風景の發達が大で無いから、或る嶋に於ける自然風景は日本に於て最も稀なるものゝ一として保存されて居る。

二　地文狀態

伊豆七嶋の中此所に記述する四嶋、三宅嶋御藏嶋新嶋及び神津嶋は總て新舊の火山嶋であつて、岩石の性質から二群に分たれて居る。三宅嶋及び御藏嶋は基性な安山岩の鎔岩及拋出物層より成るコニーデ形火山錐であつて、御藏嶋は東西南北各五粁の大さを有し、壯年的に開析され、面積は小なるに係らず高度は最大で御山の頂に於て八百五十米に達して居る。周圍には高い海蝕崖と砂濱とを繞らし、崖の高さは最低百米最高五百米である。平均傾斜起伏共に大であるから、住居には適當で無く、里及び南鄕の小村二を見るのみである。三宅嶋は東西南北各八粁の大さを有し、火山錐の上部には徑千百米のカルデラが存在して、中に火口原火口丘を存し、雄山の標高八百十四米である。輻射谷は淺く、海蝕崖は低くて最高の所で五十米に過ぎず、火山錐の周圍には裾野の緩斜面が廣く横はり、分解した火山灰礫で蔽はれて耕作に適して居る。

此れに對する新嶋及び神津嶋の二嶋の鎔岩は酸性な流紋岩類であつて、其の粉碎されたものは雪白色の石英砂の長い砂濱を形成し、三宅嶋の斷片的に發達する漆黑色の砂と著しき對照をなす。火山體は頂の平坦なトロイデ形鎔岩圓頂丘の巨大なものを基本形とし、山側は一般に急峻で森林に蔽はれる。新嶋は南北の長さ十粁、東西の幅三粁、宮塚山の標高四百二十八米、神津嶋は南北六粁、東西四粁、最高峰天上山の標高五百七十四米である。此の二嶋では火山拋出物の厚層より成る低い臺地が海岸附近に存在する爲めに耕作居住地が與へられる。

火山活動は一火山嶋によつて一定の習癖を有し、三宅嶋の噴火は平均五十九年の週期を以て起り、噴火型式はエトナ式或はヴエスヴイオ式で中央火口の活動に伴ふか或は獨立に火山錐の側面に於て小火口列を生じ、爆發型式は多く强ストロンボリ式で、火山礫を飛ばし鎔岩流を流す。明治七年の噴火では高度五百米以下の輻射線上に火口を生じ、鎔岩は嶋の北側東郷の小部落を埋めた。以前の噴火でも西南、東方等に屢鎔岩流を出した形跡があるけれども、村落の位置は噴火に對して消極的トロピズムを示して居ない。阿古村の如きは村の一部が鎔岩流の上に在つて、道路は天然の鋪道を示して居る。

神津嶋新嶋の噴火は歴史によると各約一千年前の承和五年及び七年(西暦八百三十八年)と仁和二年及び三年(西暦八百十六年)とに起つた形跡があつて、其の爆發型式は少くとも强烈なヴルカノ式恐らくペレー式に近いものと思はれ、熱灼した拋出物は森林を燒き海を埋めた。鎔岩は大圓頂丘を形成し、拋出物層よりなるホマーテ形火山錐を大部分蔽ひ隱した。此等の嶋が新火山嶋であると云ふ事實すら今は忘れられて居る。海を埋めた拋出物層が無ければ二嶋共に住居に甚だ不適當であつたに違ひない。

新鮮な火山拋出物の堆積して居る地表は大嶋の火口原では全く砂漠狀の不毛の地であるけれども、三宅嶋の火口原八丁平(或はやうの平)にはヤシャブシ等の倭樹が生長して居て、多數の牛が放牧されて居る。最も完全に原狀を保つて居るのは神津嶋天井山の西側ホマーテ火山錐の面であつて、白島と稱せられ積雪のやうに遠方からも白く見える。三宅嶋では概して新噴出物が植物に蔽はれることが迅速で、明治の初年には雄山の頂上部が一面に黑く見えたさうであるが今は青々とした「山」と化して居る。火山岩は建築石材として特に切り出す所なく、必要に應じて海岸の玉石から容易に得られる。阿古村に一特徴を與へる防浪防風の石堤は黑色の塊狀鎔岩の岩塊を利用して造られて居る。唯だ流紋岩鎔岩の特別な部分、卽ち新嶋向山トロイデ形

圓頂丘の表面を作る塊狀鎔岩は甚しく浮石質である爲に、採掘して抗火石の名の下に種々の用途に供せられて居ることは人の知る所である。

要するに諸嶋に於ける火山作用は一時的の災害は及ぼしても、幾多の恩惠を與へて居る。其れかあらぬか三宅嶋に就てみるに、所謂「御神火」を神業として畏敬するにしても此れに對する嫌惡の情は遂に認めることが出來なかつた。反つて事代主命が嶋を燒け廣げると云ふ傳をさへ生じて居る。事實に於て鎔岩流が海を埋めることは他日の耕作地の面積を增加することになるので、嶋民に幾分の心强さを感じさせて居ることは見逃せない。此れと反對に新嶋のやうに軟弱な火山拋出物の上に居住地が存在する所では迅速に破壞作用を及ぼす海蝕の爲めに、元來狹い土地が減少する一方であるから、海岸線の變化に對して人々が幾分不安の念を抱いて居るのは無理の無いことである。

諸嶋の氣候は溫和過ぎる位であつて、夏時炎熱を感せず、冬期の降雪は山頂に限られて居る。雨量が多く及び溫度が高く、夏の頃霖雨が續くと豐に黴を生ずる。冬季は西風が强く航行を碍げる。潮流は黑潮の流域に當るから海岸近くでも大なる流速を有し、平常の漁業に於ても其の智識は重要であるのみならず、難破した時などは其の有無が死活の問題となる。溫暖淸澄な海水に住む鰹の遠洋漁業は主として石油發動機船を利用する「國」の漁夫によつて行はれ、四五月の飛魚漁業も亦季節的に移住して來る內地の漁夫が主として營む。特に嶋人の手による重要な海產物は云ふまでもなく新嶋に於ける室鰺の干魚(くさや)である。

植物群は氣候の最も直接な表現として此の諸嶋の景色に特色を與へる。山腹になほ廣く分布して居る原始林を觀察すると、明かに暖帶林の特徵を具へ、主要林木シヒ、イヌグス、ユズリハ、ヒサカキ、ヤマモモ等の常綠濶葉樹でシヒが最も多數を占め、其の實は秋季に東京の市場に現れる。三宅嶋の東部では山頂より海岸に至るまでの山腹及裾野を蔽ふ。高さ十米にも及ぶ

喬木があつて、樹幹にはオホタニワタリのやうな熱帶性羊齒が着生して居る。此の林相は內地に於ては殆ど滅びて了つた所のものであるから、昔の自然風景をしのぶにも貴重なものと思はれる。

植物群の狀態は此の地方の栽培植物の種類を大體に定めて居る。人造林として三宅嶋では生育の極めて遲い黃楊の林があつて北麓神着村伊豆村の邊の森林の下方境界に近くに多い。村落に近い所では椿の植栽が行はれ、箇々の家の周圍には防風林の形で植ゑられるか、或は三宅嶋坪田村の西部に於ける如くやゝ廣い林を形成して居る。椿油は嶋民の食料としても生產としても大なる意味を有すること地中海地方の橄欖に似て居る。畑に作るものは麥甘藷を主として、馬鈴薯里芋等である。

三　人文狀態

聚落を所謂文化地理學的形態の一として觀察する時に、二つの見方が必要である。一つは居住地の地理的位置に制約を及ぼす必然的條件であつて、他は其れを中心として行はれる文化風景の進化である。此等の嶋々では比較的簡單な關係が此等の間に成立して居るから、我等非專門家の手にでも多少の說明が出來さうである。

新嶋神津嶋及び三宅嶋に就て見るに、村落の位置と碇船地との關係は必ずしも密接でない。村落形成の第一條件は人間の集團に對して食料を供給する耕作地の存在である。三宅嶋に於ける五村は其の村に接して、或は短時間に往復の出來る距離の所に耕作に適する緩傾斜を有して居る。此れに對して東海岸には御池濱其他の小灣があつて、風波を避けるに便利であるに係らず、炭燒等の必要から一時的の住居が出來る丈で村落は發達しない。

神津嶋の一村は南方の低い鎔岩臺地面に耕作地を有し、新嶋の二村の中本村の海岸は船付きが寧ろ不良で、風浪の高い時には北方若郷の小村に船が着くのである。卽ち村の位置に對して漁業及び交通は從であつて農耕は主である。從

つて密集した道路の狹い、純粹の漁村の形狀を有するものが無い。農民と漁民とは多くの場合分離して居ないけれども、三宅嶋では已に多少の分化が生じ、神着村及び伊豆村は海面上五十米内外の高度に存する純農村の形態を有し、阿古村は海岸に直面して可なり漁村の色彩が濃くなつて居る。斯かる瀕海の山地の下部が居住の地として撰ばれる事はハウスホーファーが云つて居るやうに、馬來種族の通有性などを考へ合せるまでもなく、此の氣候此の地形の土地に於ては人種の如何を問はず最も自然な生活法から生じ得ることと思はれる。

飲料水の聚落位置に及ぼす影響は、概して水に乏しい新火山嶋では相當に大でなければならない。少くとも外の條件が同じである時に、水に便利な地點に居住地が偏する筈である。三宅嶋に於て裾野の上にある村卽ち神着及び坪田の如きものと、海蝕崖下の阿古の如きものとは、甚しく違つた狀況の下に置れて居る。雨量は豐富であるが、谷の發達が惡い爲に永久性の水流なく、雨水は鏃岩層間に滲透して海蝕崖面に於て泉となつて噴き出して居る。從つて前の種類の村では雨水を貯藏する井戸或は立木の幹から雨水を導いて瓶に湛へる等の必要が生する。

谷の完全に發達して居る開析火山嶋御藏では、電氣を起すに足る程の水流が至る所の谷底にあつて、海蝕崖面に於て懸谷となり、瀑布として奔流して居る。其の瀑布は天氣の晴朗な日に三宅嶋より望見することが出來、水の缺乏に苦む村人の歎息を大きくさせる。若い小火山嶋に於ては廣い耕作地の存在と水利とが到底兩立し難いのである。新嶋及び神津嶋に於ては水平な拋出物層を掘つて井水を得るのみならず、トロイデ形火山體の中腹或は海蝕崖に於て淸冽な泉が湧出するのを見る。

各村落間の交通の少いことは嶋嶼に於ける一特色たるを失はない。三宅嶋の五箇村に就て云へば、各村の間二里乃至三里の道で一人の行人にも遇はぬことが稀で無い。此の結果は各村を孤立せしめることとなり、極端な例で云へば三

宅嶋の各村中坪田村の一村のみ甚しく言語及び風俗を異にするやうな現象を呈する。當然過ぎることであるが、各嶋間の交通の不便は更に一嶋に夫々の習俗を作らせて居る。例へば脊負籠の形の末に至るまで八丈嶋神津嶋三宅嶋大嶋に於て明瞭に異る。其他一々例を擧げ切れぬ一嶋の特色があつて互に眞似ることをしない。此の如き交通の不完全は刺戟欲望或は智識交換の不足の基となり、文化力の發達を少からず阻害する。

村落を中心として開かれて行く文化風景は、上記の理由から當然單純でなければならない。農村の一例として三宅嶋の神着村を擧げれば、村の附近に限つて黑松の並木がある。常綠濶葉樹及び椿の間に、不規則に散在して茅屋が並び、道路は小輻射谷の爲め坂道をなして曲折し切り通しが多い。其の系統は村落間の交通路である同心圓的で比較的平坦なものと、山頂に向ふ山路に連絡する輻射的なものとの二種に分れる。交通機關は無く牛以外の運搬動物を有して居ないから、轣轆の音を聞くことが無い。乳牛の聲が絶えず聞え、小規模ながら酪農業が行はれて居る。村の境を出ると高原的な裾野の斜面で畑となり、磯の海蝕崖の際から上方の森林との境まで續く。此の耕作地が一村の周圍に作られた所謂文化草原(クルトラアステッペ)であつて、其の形狀は暮春の頃に此の附近の海上を航する人の眼に黃色の斷片として認められる。村の東には燒け場とよぶ明治七年の鎔岩流及び火山礫の地が黑々と見える。火山礫の表面は僅かに天草の干し場にしか使はれて居ない。

天然林破壞の程度は方面により非常に異り、其の關係は意外に複雜らしい。例へば製炭の目的で伐採が行はれる爲めに林相を變じてヤシャブシを主とする落葉樹林になる所が多いが、其の區域は何に支配されて居るか全く明瞭では無い。然し半農半漁の坪田村及阿古村の上方に於て天然林が破壞されて草山の部分を其間に挿み伊豆及び神着の二農村の上方では原始林が廣く保存されて居ることは注意に値する。果樹の畑

或は急斜面に於ける段々畠の無いこと其他の單純な田園形は土地が極めてインテンシーヴに利用されて居ないことを證據立てて居る。センプルの記して居るやうな或る南洋嶋嶼の盆栽的農業或は其の日本の農業の一特質として述べた間作の如きものは此所では絶えて見られない。其外植林が餘り行はれず竹藪の存在しないことも土地利用の强度の小なることを示す。

新嶋本村の景色は地形地質の異る如く甚しく違ふ。第一に村の家々は密集して砂質の平坦地上に存在し、風に飛ぶ砂を避ける網代垣を周圍に繞らせる。村内の道路は若郷と同じく海岸に平行及び直角の二系統に分れる。三宅嶋では稀に塊狀鎔岩の天然石を積んだ粗雜な石垣を見るのみであつたが、此所では加工し易い流紋岩の立派な石塀を有する家を見られる。彼の嶋の石坂道或は泥濘の赤土道の代りに坦々とした砂の道があつて夜も灯なしで歩ける。此所では牧牛の聲を聞かず、其の代りに網を曳く漁業者の叫びを聞く。然し村の東邊には廣い小松林に圍まれた靜かな畑が廣がり、頭上に擔ふ天秤棒の兩端に小さな肥料桶を吊る婦女の往來を見る。海岸の砂丘の下には漁具を入れる納屋の列があつて、其の床は高く八丈嶋の穀倉を思ひ起させるが、共に南洋のモーテイーヴを藉りて説明する必要はないであらう。

神津嶋村は前二例の中間性質を示し、標式的半農半漁の生活から起つた形態を示して居る。村の道路は石疊みの緩かな坂が多く、人家は割合に密集して居る。漁業と農業が男女の分業になつて居ることは新嶋に同じく、又運搬に屬する仕事が女の專業になつて居るから、七嶋共通である頭上運搬の習慣は此れ丈で完全に解釋される。山中に於ける勞働が女の義務であることも新嶋と同じである。例へば朝早く海岸に行くと、其の途中で幾人もの漁夫が夜釣から戻つて片手に飛魚を提げ片手には漁燈を携へ來るのに出合ふ。此の時間に天井山の山頂附近をみると五百米の高さの白嶋の斜面を打ち連れて登つて行く女の群が小黑點になつて蠢動するのが認め

られる。彼等は此の山を越えて東側の急谷の邊で終日薪を採り、夕方になると徑約一米の大きな球にして頭上に「かづい」て歸る。此等の薪の束は家の周圍に積み上げ其の量の多いのを誇りとする。

甚だ粗雜な記述であるが、此等の生活樣式及び文化風景は單に、今見る所の人間と土地性質とだけ與へれば決定される所のものとは思はれない。地理的位置從つて交通は重大な因子で無くてはならない。假りに此等の嶋を鹿兒嶋灣の中の櫻嶋のやうな位置に移せば、交通物資輸送並に生産等の間に存する機巧は全然違つたものになる筈である。（勿論此際他の條件を全く同じとすることは無理ではあるが假りに斯く考へる）一般に更に複雜な因果關係によつて結び付けられて居る聚落景觀を明確な說明的字句で記述する方法は無いであらうか。

此れは全然一の思考實驗に過ぎぬが、(1)例へば此所に物資に缺乏し交通の發達せぬ地方がある。日本ならば起伏の大なる山地中の山村である。聚落の形は簡單均質で、家屋の材料は附近の天産に仰ぐ。生活の爲の勤勞は大である。（）一方に衣食の資料は相當に豐富で、交通の發達せぬ地方がある。其の多くは山勝ちな半嶋或は嶋嶼である。此の場合も聚落の形は大體均質としても、前者と異なり勞力には餘裕がある。(3)前二者と反對の極に立つものは、交通が發達し從つて遠近から物資の供給の充分ある都會であつて、聚落の形狀は非常に不均質で、構成材料は良否共に內外遠近から來る。其所には善惡兩意義に於ける文化砂漠（クルトゥルロス）が現出する。

此の範圍內で地方的な功利及び好尙による多樣の變化が可能である。其れは土俗的、歷史的、藝術的或は宗敎的其他何であつても宜いが、大體の形態は以上の中間に於ける種々なる聚落景の何れかに相當する。細部の形狀に就ては夫々の專門家が扱ふことも出來やうが、此等に系統を立てて的確な術語を用ゐ、圖學的表示を以て合理的な說明を下すのは將來の地理學者の仕事の一つでなくてはならぬ。